

尾関周二『多元的共生社会が未来を開く』農林統計出版

島崎 隆

かつて尾関氏は「共生・共同」の観点から、人間・自然・社会の問題群を意欲的に展開してきた。そして氏は、共著『〈農〉と共生の思想』の「総論」で、こうした観点が近現代の文明をエコロジー的・環境哲学的意味においても大転換することを明示していた。本書（Ⅰ～Ⅳ）では、そのタイトルに「多元的」という形容詞が付いて、さらにその視野が拡大してきた。共生の要素はたくさんあるので、共生の多様性を問いつめていくと、おのずと「多元的」とならざるをえないといえよう。さらに本書で展開される内容は、人間と人間の共生、人間と自然の共生という従来からの主張のほか、農と工の共生、多文化的共生などにまで広がる。本書Ⅰの多文化主義やディープ・エコロジー、さらにリベラリズム（ロールズら）とコミュニタリアニズム（サンデル、マッキンタイアら）などの規範哲学上の論争への論及にそれが明示される。また安藤昌益（Ⅱ）、宮沢賢治（Ⅳ）らに注目した個所にも、その傾向が存在する。そして、実に多くの論者の主張を取り込みつつ、多様な論点をわがものとする著者の頭脳の柔軟さと幅広い理解力には敬服する。こうして本書では、説得力に富んだ魅力的主張が満載されているといえよう。

本書は四部門構成であるが、大雑把にいうと、Ⅰ「共生の思想と現代」、Ⅱ「共生理念と〈農〉の思想」は、すでに氏によっていわれてきたことのさらなる補足・展開であり、続くⅢ「人類史・世界史の新たな視座の探求と共生概念の意義」、Ⅳ「近現代文明の危機と共生社会へ向けて」は、最近の氏の新しい主張となっている。Ⅰ、Ⅱにおいても、新しい興味深い論点がちりばめられているが、ここでは、Ⅲ、Ⅳに注目したい。

Ⅲは、文明論的にスケール大きく展開される。まずは、マルクスの「人間と自然の物質代謝」という観点から、人間—自然間の環境史が展開されていて興味深い。七〇〇万年前の人類の誕生から一万年前の農業革命の時代までを起点としつつ、近代文明への転換など、人類史の長い歩みを顧みなければ、現代の問題は解けないという思いが氏にはある。Ⅲで注目すべきは、柄谷行人、ウォーラスティン、ハーバマースらの歴史観の紹介・検討であり、評者にとってもおおいに参考となった箇所である。柄谷の交換重視の歴史観は従来のマルクス主義の史的唯物論に新鮮な刺激を与えるものであり、また彼らの国家論からすると、略奪・再分配を担う国家は単に上部構造などではなく、一種の経済的基盤をなし、しかも裁判権など正統な権力を保有する。そしてウォーラスティンを引き合いに出して、資本主義システムは最初から一国家的システムではなく、歴史的に、多くの国家を含む世界システ

ムであり、資本主義の形成は同時に国民国家の形成でもあった、と指摘される。つまり近代市民社会の形成と国民国家のそれとは一体だということであろう。IVでは、3.11の大震災、原発事故を契機に、近現代の文明を再検討することが目指される。氏によれば、そもそも近代の本質的要素は、科学技術主義・産業（工業）資本主義・国家権力の三つであり、これらの合体的状況が危険な原発をも推進してきた。そこで氏は、近代国家が内部では立憲主義を唱えつつも、国際社会では弱肉強食の状況だったと、その矛盾をつく。さらに国際的観点からすると、北の先進国は脱近代を目指す、南の途上国は近代化を目指していると、その利害の対立が指摘されることも興味深い。というのも、焦眉の地球温暖化問題などでも、まさにそうした対立が大きなネックになっているからである。いずれにせよ、本書では結論的に、IIでも強調されるように、農林水産業の全体を含む〈農〉の復権による、資本主義からの漸次的脱出が展望されるのである。だが、かつての農本主義を復権するのではなくて、目指すは持続可能な「農工共生社会」であり、そこでは、少数の大工業は残ることとなる。

ここで本書へのコメントを二点述べたい。ひとつは、ウォーラスティンらの世界システム論の資本主義理解と、マルクス『資本論』におけるそれとは、必ずしも整合的ではないのではないかという疑問である。というのは、後者では、近代市民社会内での平等の等価交換のもとでの搾取と資本蓄積が可能とされるのにたいして、前者では、評者によれば、国家間の権力格差に基づく不等価交換や貢納・略奪が欧米社会の経済発展に不可欠とみなされるからである。もちろんこれは、どちらかを切り捨てれば済むという問題ではないだろう。もうひとつは、氏の展望する「農工共生社会」の内容をもう少し具体的にお聞きしたいということである。動物である人間は不断に食べなければならない以上、〈食〉の問題は人類生存の最優先課題である。この点、TPPの危険性も指摘される。だから〈農〉の重視には大賛成であるが、そのさいの工業の位置づけはさらにどうなるのだろうか、という問題である。社会全体のIT化・情報化の推進に伴い、〈農〉の高度技術化の可能性・危険性はどう評価されるのだろうか。環境重視・健康重視・省エネの〈農〉の追求という方針をまずは掲げるべきか…。そのさい巨大技術はやはり必要なのだろうか…。

いずれにせよ、以上のように、氏は現代社会の多種多様な問題群にしっかりと向き合い、現代へ向けて発信している。しかもその叙述は平明であり、氏の円熟ぶりを示す著作となっている。現代社会の行方と展望をできるだけスケール大きく、だが現実味を失わずに考えてみたいというときに、本書は、類書のなかでも説得的で貴重なものとなるように思われる。

